

文化

「お江戸日本橋」のにぎわいをよみがえらせようと、東京・日本橋室町東地区で大規模な再開発が行われている。先月末、第1弾として2つの商業施設「コレド室町」（三井不動産）と「ユイト」（野村不動産）がオープン。平成26年までに5街区（約1万2000平方メートル）に5つの複合ビルが生まれる計画だ。マスターアーキテクトとして指揮・調整を務めた建築家、團紀彦さん（54）に写真に聞いた。

マスターアーキテクトは、街並み全体を俯瞰し統括する役割といえはいいだろうか。欧米では一般的な職能らしい。

例えば、19世紀前半のフランス。セーヌ県知事のジョルジュ・オスマンがパリ大改造を断行した際、街区ごとにマスターアーキテクトのような人物を置き、街路灯一つに至るまで調和ある景観を追求したという。

翻って「日本では長らく道路と建物が切り離されて考えられてきた」と團氏は言う。

「マスターアーキテクト」の團紀彦氏



「道路は土木の管轄で、建築物の大半は民間主体。それぞれの論理で開発が進み、古い街並みや特徴ある街路が壊されてきた」

五街道の起点として栄えた日本橋。高度成長期に、象徴の「日本橋」が高速道路に覆われたことで、街の魅力は少なからず損なわれてしまった。今回の再開発でどう変わるのだろうか。



「通り」ごとに日本橋の魅力再生へ

まず、コレド室町が入る「室町東三井ビルディング」とユイトのある「日本橋室町野村ビル」。「中央通り」沿いのファサード（正面）を見れば、狙いは一目瞭然だ。通りを挟んで向かい合う重要文化財の三井本館（昭和4年）、日本橋三越本店（昭和2年）などに合わせ、低層部分の横ライン「コーニスライン」を高さ100尺（31メートル）を高さ100尺（31メートル）

に統一。縦の列柱のリズムもそろい、威風堂々とした統一感のある街路になっている。中央通りから東のエリアには、石畳を敷き詰め江戸情緒のある小路を計画。中央通りと交差する「江戸横通り」は浮世絵にも描かれた由緒ある

道で、その名の通り、桜並木の歩道を整備する予定だ。4年後にはオフィス、住宅、商業施設、多目的ホールやシネコン（複合映画館）などがあ

る一大エリアが完成する。團氏は「通りは都市の血管みたいなもので、街の活性化全体に影響を与える。通りとビルが一体となり、日本橋の潜在能力を引き出せたら」と話している。